

箱女

舞台には大きな箱
ステージと客席の境目はなく、椅子は雑然と並べられている。

無音。

イイ悪魔が踊る。箱の中。地球。
未来。永遠。限界。

ワルイ悪魔途中で登場。

2羽の悪魔の追いかっこ。やがて2羽は電線に寄り添って止まる。

箱の中から一人の女が登場する。

箱女

「あのカラス、なんでわざわざこんな大雨の中、電線に止まってるんやろ。

どっか、屋根あるとこ入れれば良いのに。

…何か、あたしみたいや。」

箱女

「いまでもやっぱり思い出す。

あたしと先輩の話。

あの日もこんな風に雨やった。あたしは、もうちよつと太ってて、ほっぺたも赤かった。
行きかう人に声かけては、無視されたり適当にあしらわれたりしてた。

でも、時々いんねんよ。こんなんでも、話してて楽しいーゆうて、あたしに会いに来る人が。

なあ。先輩。今何してんの。どこで、誰と一緒におんの。あたしはここにおるよ。毎日いろんな人たちと顔合わせてるけど、結局先輩のこと思い出してるよ。

先輩、約束したやん。そのスーツが似合うようになったら、また一緒に出掛けようって。いつまでたっても迎えに来おへんから、あたし、こんなになっちゃったよ。」

「なあ、先輩。あたしら、これで良かったんやろか。」

M1 ame

♪

「あたし、こんなになっちゃったよ。」

空は泣いている 誰かのために

今日もまた 空が泣いている

自分のために流した涙は汚い

その汚い涙はこの箱の中をすぐにいっぱいにしてしまう

ゆっくり離れた手を見ないで あなたは呟いた 「また」と
「また」がないことくらい分かっていた
どうしようもないことも知っていた

どうしてあんなことを言ってしまったんだろう
口をつけて出てきた言葉「一緒にいたいな」

何もかも知っていたのに
私の正体、あなたの口癖、そしてこの関係の末路

何もかも知っていたのに

私の正体、あなたの口癖、そしてこの関係の末路

ありがとう
おめでとう
さようなら

一気につぶやくよ

私のつぶやきは雨になる。

空は泣いている 誰かのために
今日もまた 空が泣いている

♪

雨の中出てくる雨音たち

箱女はすっと、箱の奥に身を隠す。

傘をさした女子高生が箱の奥から現れる。

女子高生 「あ、雨や。こういうとき不便なんよね。あら、早々に浸水してきよったわ。(水を掻き出す動作) はあ…。まったく。

家って言うのはあれやね。守られているようで、全然守られてへん。窓締めてもひそひそ声まで聞こえてくるし、なんかずっと誰かに見られてるみたいや。休まってるようで、全然休まらへん。心も、身体も。あ、ほら。だからあかんねん。雨は、降ったら…。」

主婦 「美奈ちゃん、ご飯にしよう。」

女子高生 「お母さん、私、今日から揚げがいい。」

主婦 「から揚げ？今日は天ぷらにしようかと思っていたんだけど。」

女子高生 「天ぷらかー。天ぷらもい…」

主婦 「じゃ、から揚げにしよう」鶏肉あったかな。」

「…。」

女子高生 「お父さん」私、バスケット部に入りたい」

サラリーマン 「バスケット？バスケットかー。バスケット…バスケットはいかな、バスケットは。」

女子高生 「どうして？」

サラリーマン 「突き指しちゃうだろ。」

主婦 「美奈ちゃん、ピアノ弾けなくなっちゃうわよ。」

女子高生 「うーん。そうか…。」

箱女が顔を出す。

箱女 「なあ。」

女子高生 「はい。」

箱女 「ちよっとそこどいて。」

女子高生 「…。」

箱女 「あたしの居場所、取らんとって。」

箱に収まる箱女

女子高生は、家に帰る。

降り続く雨 *ame* 続き

オーブニング

箱女の隣で誰かが雨宿りを始める

誰かは後ろ姿のみ。顔は観客からは見えない。

箱女

「…どないしたん？雨宿り？もうちよつとこつちおいでよ。そこやと、濡れるよ。スーツの裾、濡れちゃってるよ。一着しかないん？そうか。あたしと一緒にやね。あたしも、これしかないもん。楽しんでいいやん。あたしは結構気に入ってるよ。一緒やね。」

なんなん、雨、嫌いなん。なんか思い出すことでもあんの。」

「あたしはねえ、嫌いやないよ、雨。そらあね、こんなところにおつたら、雨降つたら何かと不便やけど、雨降らへんと、カラカラなっちゃうからね。あんたが毎日食べてるお米やって、雨なかつたら作られへんやろ。」

「え、まあそうやけど。」

「なんなん。賢そうな言葉ばかり並べて。」

「ふーん。」

「いろいろ知ってるんやね。」

「うんうん。」

「はあ。あーそう。人工的に、作り出す…か。」

「なんでも知ってるんやなあ。」

「ふーん。」

「自然はもう、自然じゃない、か。」

「いや、なんでもいいけど。」

「あ…雨止みそうや。今のうちに帰ったら。」

「あたしは、明日もここにおるよ。行くところなんかないもん。たぶん気が向いたらどっかに行くかも知れへんけど…今のところ、ここにおると思うよ。」

「うん。あたしも、楽しかったよ。じゃあね。」

「…先輩!!」

あんたや、あんたのことや。いろいろ知ってるから、先輩!!何か知らんけど、あんまりくよくよしたらあかんで!!そんだけ、いろんなこと知ってるんやから、自信持って!!先輩やったら大丈夫やで!賢いんやから!!」

「はあ。社会人二年目ってどこか。可愛いな。」

M2 目覚まし

朝の目覚め。皆が一日を始める。もちろん、箱女もそうだ。

夢の中から現実を引き戻される瞬間。いい目覚め、悪い目覚め。良くも悪くもないいつも通りの目覚め。お布団に別れを告げる人、お布団にこれから入る人。目覚ましの音が聞こえる

すっと、舞台上に現れるホームレス。大きなゴミ袋を引きずり、客席の奥へと消える。ホームレスはある日突然姿を現しこのところずっとこの場所を行ったり来たりしている。

身なりも汚く、薄汚れており、時折大きな声で話し出す。その様が不気味で、誰も、寄り付かない。

箱女 「あたしの朝は早いんよ。いろんな人が来るからね。皆が来る時間に合わせて、あたしも箱から顔を出す。」

ホームレスが去ったあとキャバクラ嬢がとぼとぼと帰路につく。

箱女 「おはよう。お疲れさん。はよ帰ってねえや。」

行きかう人々と箱女。

コインとモノを交換する。通貨。資本主義。
人々は無言で通り過ぎ、箱女だけが喋っているように見える。

箱女 「あ、おはよう。」

箱女 「いつものやつ？」

箱女 「ちよっと待ってね。」

箱女 「はい、120円。」

箱女 「えっと…」

箱女 「ごめんね、傘はないねん。上のコンビニにあるんちゃうかな。よう降るね。」

箱女 「あ、おはよう。」

箱女 「はい、150円。」

箱女 「はい、いってらっしゃい。」

箱女 「こんだけここおるとね、顔も覚えるわ。あ、おはよう。おっちゃん。」

人々の中からくたびれたサラリーマンが顔をだし、親しげに箱女のもとへやってくる。
出勤途中のサラリーマン。おそらく妻子がいそうな風貌。

サラリーマン 「おはよう。」

箱女 「スポニチ？」

サラリーマン 「今日はこっち。」

箱女 「えー。おっちゃん、こんな競馬が載ってない新聞も読むの？」

サラリーマン 「おいおい何をいまさら。一応、日経は毎日チェックしてるよ。」

箱女 「えー。そんなん、知らなかったわー！」

サラリーマン 「ためになっっているのかどうかは分からないけれどね。ここではただ、競馬の結果が知られたらいいの。」

箱女 「そうやったんや。それやったらうちでも、それ毎日こうやってよー！他のも置いてあるねんよ。」

サラリーマン 「はは。都合してもんがあるからね。今日はちよつと遅刻。競馬は…読む暇がないなあ。」

箱女 「今日、遅刻なん？いつも通りじゃない？」

サラリーマン 「4月だろ。この時期はもう少し早く出ないと。若造が出社してくる前に。」

箱女 「そうなんや。おっちゃんも大変やな。」

サラリーマン 「はは。」

箱女 「体に気つけや！ちゃんと家帰ってる？夜遊びばかりしてたらあかんぞ！」

サラリーマン 「はいはい。」

箱女 「わかってるんかいな。」

サラリーマン 「もう、行かなくちゃ。行ってきます。」

箱女 「行ってらっしゃい。」

箱女 「…偉いな。おっちゃん。」

「…4月か…」

「…あ！！」

先輩だ。

暗い顔をした若者がここにも一人。

箱女 「先輩やん！」

先輩 「あ…。」

箱女 「おはよう！昨日ちゃんと、帰れた？濡れて、風邪ひかんかった？」

先輩 「僕は…大丈夫です。」

箱女 「なんなん、全然元気ないやん。昨日は結構喋ってたのに。」

先輩 「昨日は、その、お酒が…」

箱女 「なるほどな！「歓迎会か！」

先輩 「はい。」

箱女 「…。」

先輩 「…。」

箱女 「ん？なに？」

先輩 「あの…これ…。」

箱女 「ミルクコーヒー？はい、98円。」

先輩 「はい。」

箱女 「はい、2円のおつりね。」

先輩 「あ…どうも。」

箱女 「はい、ありがとう。」

先輩 「…先輩…行かんでええの？」
「…あ、はい。行きます。」
箱女 「行つてらっしゃい！」

舞台の上にはいくつもの電線が張っている。
電線のは2つのくぼみ。鳥がとまるとよくなる、あれだ。
2匹のカラスが顔を出す。

箱女 「また、あんたらか。」

イイ悪魔 「またって何さ。失礼な。」

ワルイ悪魔 「ほんとほんと、自分で呼んでおいてさ。」

箱女 「呼んでない、呼んでない。」

ワルイ悪魔 「始まったようだね。」

イイ悪魔 「そろそろだったもんね。」

箱女 「なに。」

ワルイ悪魔 「気になるんだろ。」

箱女 「誰が。」

イイ悪魔 「おいおい、誰がつて、自分しかいないじゃない。ここは、あなたの箱の中なんだからさ。」

箱女 「ふん。」

イイ悪魔 「気になってるね。完全に。」

ワルイ悪魔 「だから、言つたら。4月は気をつけろつて。」

イイ悪魔 「怒られてるよ。」

箱女 「嘘！」

ワルイ悪魔 「ほんとほんと、4月にいきなり始業時刻ギリギリの出勤はまずいだろ。」

イイ悪魔 「4月じゃなくてもまずい。」

ワルイ悪魔 「新人である限り。」

イイ悪魔 「先輩がいる限り。」

ワルイ悪魔 「ゆとりだねー。完全に。」

イイ悪魔 「ゆとり世代か。平成だね。」

ワルイ悪魔 「あー、怒られてる怒られてる。」

イイ悪魔 「涙目だ。可哀そうに。」

箱女 「…」

≡ オフィスワーク

怒られる先輩

新聞を持って怒るサラリーマン

その他の社員は知らん顔

サラリーマン

「一つのミスがすべてを台無しにすると考える。いいか。日本の社会ってのはな、すべてにおいて弱肉強食なんだよ。我々のような下請けは、取引先を失ったら自分の足では立っていけないんだよ。すべてはつながっているんだ。お前のたった一度の電話のかけ忘れで、すべての社員たちが人生を失うかもしれないんだ。それが社会だ！わかってんのか？」

先輩

「…。」

サラリーマン

「返事は？」

先輩

「あ…はい。」

サラリーマン

「『あ、はい。』か。」

先輩

「すいませんでした。」

後ろで見ていた悪魔たちが口を開く。

ワルイ悪魔

「こんな会社とつとと辞めて、とつとと事業を起こすこと。そのノウハウを学ぶために今ここにいるだけ。こんな小さなブラック企業はこいつにとつた

サラリーマン

「将来か。」

イイ悪魔

「お前が今守るもの、それは」

サラリーマン

「将来か。」

ワルイ悪魔

「薄っぺらい」

先輩

「『すいませんでした。』」

イイ悪魔

「きつといつかは大きな舞台で勝負できる。自分にはその資質がある。」

サラリーマン

「このネジ一本が、この一本が、すべての歯車になっているんだ。」

ワルイ悪魔

「おいおい何をえらそうに。お前だってその昔、」

イイ悪魔

「ネジに興味なんか」

サラリーマン

「もちろんなかったさ。」

ワルイ悪魔

「それも万能なネジじゃない。」

先輩

「コピー機。」

サラリーマン

「それも数あるコピー機の中のある機種にだけ対応するちっぽけな、ネジ。」

ワルイ悪魔

「下請け会社の悲しい性だね。」

イイ悪魔

「一人じゃ立ってられない。」

サラリーマン

「わが社の製品は、開発部が長年の研究の末たどり着いたスマートなデザイン性と、強いフォルムに示される耐久性が特徴です。」

先輩

「はい。私は御社の経営理念に惹かれ、入社を希望しました。入社後はいち早く仕事を覚え、少しでも御社の実績に貢献できるように必死で頑張ります。」

サラリーマン

「お前、仕事覚える気あるのか？」

先輩

「いや…はい。」

サラリーマン

「とにかく、今日はミスのないように、な。」

先輩

「あ、はい。」

サラリーマン 「『あ、はい。』か。」

先輩に近寄る同僚二人

ワルイ悪魔 「おい、飯行こうぜ。」

イイ悪魔 「行こう行こう。」

ワルイ悪魔 「持つべきものは、同期だよなあ。」

イイ悪魔 「ミスは誰にだってあるよ。」

先輩 「おう、行こう。」

同期との昼休み

先輩 「はあ。」

ワルイ悪魔 「まじ、災難だったな。」

イイ悪魔 「何もこんなときにね。」

ワルイ悪魔 「お前、昨日帰れたか？」

先輩 「うん。」

イイ悪魔 「終電だったんじゃない。」

先輩 「あんまり覚えていない。」

ワルイ悪魔 「まあ、帰れたのならいいけど。」

先輩 「うん。」

•••

イイ悪魔 「連絡ないの？」

先輩 「…うん。」

ワルイ悪魔 「向こうも忙しいんじゃない。」

先輩 「うん。」

イイ悪魔 「気長にまとう。」

先輩 「いや、もうダメかも知れない…。」

ワルイ悪魔 「ダメって、何が。」

イイ悪魔 「5年も付き合ってきたんでしょ。いくらなんでも…連絡くらい…。」

先輩 「はあ。」

ワルイ悪魔 「元気出せってー。」

先輩 「史上最高に最低な日だ。」

イイ悪魔 「最高に最低ね。」

後ろから見ていた箱女、たまらず声を出す
同期のその瞬間2羽のガラスになり箱女のもとへ飛んでいく。
先輩はとぼとぼと歩いていく。

箱女 「なんなんそれニ可哀想すぎるやんニ」

イイ悪魔 「可哀想？自業自得だと思っけど。」

ワルイ悪魔 「仕事にプライベート持ち込む時点でアウト。」

箱女 「そうやけどー！ー！」

ワルイ悪魔 「だめだね。また悪い癖だ。」

イイ悪魔 「わかっているけどやめられない。」

箱女 「あ…」

一瞬で姿を消す悪魔たち。電柱にはガラスが2羽止まっている。
とぼとぼと来た道を戻るキャバクラ嬢。

箱女 「どうしたん？あんた、今朝はよりに帰ったんちゃうの。」

キャバクラ嬢 「帰ろうと思っただけだよあ…。」

箱女 「どうしたん？今までどこにおったん？」

キャバクラ嬢 「…。」

箱女 「まさか、あんたまた…。」

キャバクラ嬢 「そのまさかやお。またよお…。…とりあえず、これ。」

箱女 「え、あ、ガム？」

キャバクラ嬢 「うん。匂いがさ。」

箱女 「ああ、そうか。はい、120円。」

キャバクラ嬢 「ありがとう。」

ガムの包み紙をあける、ガムを口にするキャバクラ嬢
少しの間、ガムをかむ音だけが聞こえる

箱女 「…そんなんな、世の中の半分は男やねんで。」

キャバクラ嬢 「分かってるもん。分かってるけど、何故かこうなっちゃうんだもん。」

箱女 「今度は誰なん。」

キャバクラ嬢 「お客さん。」

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

「あんた、また…何回…二いや、なんでもない。」

『同じこと繰り返すねん。』でしよ。私ってなんでこんなに男運ないんだらう。」

「運だけやないと思うんやけどなあ…。」

「え、なにか言った？」

「いやいや。いや、また良いことあるよ。」

「本当かなあ。いいことあるかなあ。」

「あるある二あたし見てみい！こんなんやで。だあれも寄ってこようへんわ。」

「寂しくないの？」

「もう、寂しくなんかないわ。この生活に慣れてしまっているしね。」

「そっか…。」

「ここにおるとな、いろんな人の人生をのぞき見してる気持ちになるんよ。

なんかね、ほんの数分やったり、通り過ぎたりしてるだけやねんけど、みんなびっくりするくらい、いろんな表情や気持ち、ボタボタ落と

しながら歩いてるんやで。

あんたもそうやったやん。初めてここ来たとき…あんときもそんな顔しとったね。」

「初めて来たときか…。」

「もう、何年前になる？」

「数えたくもないよ。あの時と…私、何も変わってない…。」

「はあ？変わらんと思う？…そんなことないで。あんときよりあんた、今、めちやくちや綺麗やで。ぎこちなかったヒールもしっかり履きこなして、

こいわ。あんた。」

「かっこいい？私が？」

「なんで？」

『「かっこいい。」って言われたことなかったから…。」

「なんでよ、いけるよ。」

「何年たっても、いい年になっても、『可愛い』どまり。みんな私のことどう思ってるんだら。妹キャラでいこうと思ったら、いくつになっても妹キャラ

しかできなくなっちゃった。もう『妹』なんていう歳じゃないのに。」

「確かに、妹ではないわな。」

「でも、これしか出来ないもん。これしかないもん。」

「妹キャラには、見えへんかったけどなあ…。」

「本当に？」

「うん。あんたが初めて来たときの第一印象な」

「え。」

「あんたが、初めてここにきて、あれはなんやったかな…。」

「…パーラメント。」

「そうや二パーラメント」えらい渋いの吸うんやなあ。 って思ったわ。」

「ちよっとだけ高いしね。」

「通なんやなと思ったわ。…でな、あの日あんたがパーラメント買いに来たとき」

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

「うん。」

「なんか浮世離れた、きれいな人が来たなあと思ったんよ。」

「え…。」

「なんか近寄りたいたい雰囲気はあったけど、綺麗な御嬢さんやな。って思った。」

「それはちよっと、嬉しいかも。」

「ほんで少なくとも、妹キャラには見えへんかったで。」

「嘘。本当に？」

「うん。それに、しっかり持ってたな。」

「何を？」

「プライド。」

「プライド…。」

「うん。幸せになりたいっていう女のプライド。愛されたいって言う強い気持ち。」

「だからな、その大事なプライド、傷つけられたら、怒っていいねんで。泣いて良いねんで。」

「…。」

「はい、そしたらもう帰り。帰って寝え。どんどん寝る時間おそなんで。」

「うん。」

「また出勤するときに顔出してや。なんか甘いもんでも食べて、元気出すんやで。」

「うん。ありがとう。はあ。なんだか毎日、同じ繰り返しだな。」

「わかるよ。あたしもそうやもん。」

「わかる？」

「うん。でも、な、今日のアなた、めっちゃ綺麗やで。」

キャバクラ嬢、帰路につく。その足取りはさつきよりも軽い。表情もやわらかい。箱女はこうやって、今日もまた独りを救った。

箱女 「ちやうで、あなた。あなたがほんまに持ってたんは、男なんか負けへんっていう強いプライド。一人でも絶対成功したる！っていう男勝りなプライド

…。でも、ほんまのことをゆうてあげる勇氣、あたしにはまだないわ。」

その様子を見ている2匹のカラス。カラスは箱女と口が聞ける。友達なのか、何なのか、この物語で語られることはない。

ワルイ悪魔

箱女

ワルイ悪魔

箱女

「おーい。油売ってないで仕事しろよ、仕事。」

「うるさいな。あたしはな、ここで油売ってるわけやないねんで。」

「いろんな人の話を聞きながら、『時々頑張れ。』とか、『元気出して。』とか、その人がその時一番言ってるほしい言葉を言ってあげる。」

「そう、それがあたしの仕事やん。あんな、意外とな、人間顔に書いてあんなねん。『こうやって慰めてー。』とか『こうやって励ましてー。』とか『嘘で

も良いから誉めてー。』とか。たいていの人間の顔には書いてあんなねんよ。…それに比べてあんならはやっかいやわ。」

ワルイ悪魔

「やっかいとは失礼な。」

箱女 「あんたらには表情があらへん。」

イイ悪魔 「簡単に心を読まれちゃ、悪魔は勤まりません。」

箱女 「なあ、ホンマに。なんであたしの中にいんの。」

ワルイ悪魔 「悪魔が。」

イイ悪魔 「2匹も。」

箱女 「だから、あたしに寄ってくるねん。なんか、世の中と折り合いのつかない人たちが。ほら、人間はな意地悪やからすぐ見えへんふりして嘘つくやろ。」

ワルイ悪魔 『そんなはずじゃない。』

箱女 「とか」

イイ悪魔 『君はもつとできるはずだ。』

箱女 「とか。」

ワルイ悪魔 「自分だつてできないくせに。」

箱女 「そんなこと、言われた本人もよく分かってるはずや。」

イイ悪魔 「でも、自分のことをよく知った人間からの励ましは、なんかうつつとうしかつたり、裏があるかのように聞こえたりする。」

箱女 「だからあたしやねん。ここで、汚い服着て座ってるあたしやねん。あたしの言葉つて、薄っぺらくて、軽くつて。せやけど、薄っぺらくて軽くても、羽毛つてあつたかいやろ。」

イイ悪魔 「見ず知らずの人間に言われる言葉の方が、嘘だと分かっていたとしても、傷つかずに素直に喜べる。」

箱女 「せやから、あたしはここにおるんよ。」

箱女 「…あ！」

女子高生がやってくる。とつくに登校時間は過ぎたころの登校だ。

箱女 「おはよう。」

女子高生 「おはよー。」

箱女 「最近みかけなかったね。」

女子高生 「ふふ。あ、これくださいーい。」

箱女 「はい、120円。」

女子高生 「やった。限定だ。」

女子高生の携帯が鳴る。

女子高生 「もしもし。うん。今駅。ちゃんと行ってるよ。大丈夫。」

箱女 「お母さん？」

女子高生 「ううん。お父さん。わざわざ職場から電話かけてくる。」

箱女 「優しいなあー」

女子高生 「いやだ。」

箱女 「はよ、どんどん遅くなんで。」

女子高生 「うん。」

箱女 「今から行ったら昼休みくらい？」
女子高生 「分かんない。…昼休みか…。いやだな。」
「…。」

箱女 「え、行かへんの？」

女子高生 「5分間。」

箱女 「え？」

女子高生 「あと5分間、ここをぼーっとしてからいく。」

しばらくして、ダンサーがやってくる。人気に気付いた女子高生はいやいやながらも登校する。
2羽のカラスは、ダンサーの周りをくるくると飛んで、姿を消す。

ダンサー 「お水。」

箱女 「はい、130円。」

ダンサー (黙ってお金を渡す)

箱女 「はい、ありがとうございます。」

ダンサー 「…よし！」

箱女 「いってらっしゃい。」

ダンサー 「…。」

悪魔たち顔だけ出して

イイ悪魔 「今日も無視ですか。」

ダンサー 「今日こそ。」

ワルイ悪魔 「今日もオーデイションですか。お仕事もしないで」

イイ悪魔 「学校も行かないで。」

M4 オーデイション

♪

「111番から120番の方ごうぞう」

Five six seven eight

4 A
9 B
11 C
16 D

数字化された私たち
Aの4番お入り下さい
記号化された私たち
Cの9番お帰り下さい

6 17 21 30

D E F C

One two three four

「14番、21番、73番、109番」

「それ以外の方はお帰り下さい。」

♪

ダンサー、他の候補者とともに踊っている。オーディション。どこか不自然につくりこまれた気がするのこれが、箱女の想像の中であるから。

「14番、21番、73番、109番」

ダンサー 「くそっ。」

ワルイ悪魔 「まただ。」

イイ悪魔 「いつも、この繰り返し。」

ワルイ悪魔 「今日も、自分の番号だけが呼ばれない。」

イイ悪魔 「大丈夫だよ。また次がある。」

ダンサー (深く、深くため息)

ダンサーに混じっていた悪魔たちが箱女のところに寄り添う

ワルイ悪魔 「出来レース。」

箱女 「諦められへんのやね。」

イイ悪魔 「いつも、いいところで邪念が入るんだ。」

ダンサーのまわりをぐるぐると飛び回る2羽のカラス

ダンサー 「あああ、二もうっ、二集中できない、二出てこないでって言ったのに、二なんでいつもいつも大事なところで出てくるの、二」

ワルイ悪魔 「呼んだのは君じゃない。」

イイ悪魔 「さっきまで一緒に踊っていたのに。」

ワルイ悪魔 「最後のところ、少し遅れた。」

「途中までは良かったんじゃない？」

「調子が悪かった。」

「床が滑った割にはうまく踊っていたよ。」

「…うるさい二二三二」

「だめだな。まだまだだ。」

「もっともっと上手にならないと。」

「もっと…もっと…もっと…もっと…もっと…もっと…」

ダンサーがくるくる回る

「もっと、もっと…か。」

「ホンマは分かっているはずやのにな、熱心に読んでたフルキャストオーディションの結果、新聞に載ってたけど、合格したのは全部有名な芸能人ばかりや
ったで。それでも、今日も踊りに行くんか。まわりの人とは目も合わさんと。毎日ここで水だけこうて。」

箱女 「…あ二」

とぼとぼと帰り道を歩いてくる先輩

「あ。」

「先輩やん「おかえり」」

「あ、ただいま。…帰りました。」

「どうやった？」

「・・・。」

「え、なに？もうちよっと大きい声で喋って。」

「怒られた！」

「そうなん。」

「返事の声が小さいって、怒られた。」

「そうか、そうか…。怒られたか。」

「はい。」

「でも、今の声、しっかり出たで。」

「今の…？」

「そう。今みたいな声で、明日はよいつて挨拶したり！」

「はよ行って…。」

「そうやで。そらあな、今より早く起きて会社行くのはしんどいと思うけど」

「…。」

「みんな、はよ行ってるやろ。」

「みんな…？」

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女

先輩

箱女 「そう、みんな。」

先輩 「…。」

箱女 「ちやうちやう。先輩の同期たちのことじゃなくて、もっと上の人や。先輩の先輩。なんて、言うの。上司や！」

先輩 「ああ…。」

箱女 「早いやろ。」

先輩 「確かに朝から、デスクで…」

箱女 「やろ?」

先輩 「新聞を読んで…。」

箱女 「…。」

先輩 「始業時間は9時だ。」

箱女 「悪いこといわへんわ。あと、30分だけはよ行ってみ。」

先輩 「…。」

箱女 「ほら、これでも食べて元気だし。チョコレート。」

先輩 「あ、ありがとうございます。120円。」

箱女 「はい、120円。」

先輩 「え…。」

箱女 「あつたりまえやーん。金とるで。甘やかせへんよ、あたしは。」

先輩 「…じゃあ、こっちにします。」

箱女 「なんで?」

先輩 「安いから。」

箱女 「あはは。なるほどね。はい、98円。」

先輩 「はい。」

箱女 「はい、2円のおつりね。」

先輩 「…あの…もう一つだけいいですか。」

箱女 「ん?何?」

先輩 「…ここ、傘、おいていますか?」

箱女 「あ、ごめんね。傘はないんよ。つてえ、先輩、今朝から降ってたやん。なんやったら昨日の晩から雨やったやん。なんで傘持ってへんの?」

先輩 「いや…会社に置いてきちゃって…。」

箱女 「あほやなあ。もう。ごめんね、ここには傘おいてないんよ。帰り道、コンビニで買い。」

先輩 「…。」

箱女 「どないしたん?」

先輩 「…。」

箱女 「そんな、入社してすぐちよっと怒られたくらいで、クヨクヨしたらあかんよ。」

先輩 「…はあ。僕ってそんなに頼りなく見えますか?」

箱女 「うーん。どう見てもピチピチ新卒一年生って感じやね。」

先輩 「そうかあ…。」

箱女 「先輩、どっから来たん？」

先輩 「え…。」

箱女 「この辺ではないやろ。」

先輩 「田舎は、北海道です。」

箱女 「それはえらい遠くから来たんやね。」

先輩 「はあ…。」

箱女 「寂しいの？」

先輩 「寂しいですよ。」

箱女 「この辺は、遠くから来た人いっぱいおるよ。先輩みたいに。」

先輩 「そうだよなあ…。でも…忘れられないんです。」

箱女 「何が？」

先輩 「えっと……彼女のことが。」

箱女 「田舎にいるの？」

先輩 「はい。」

箱女 「それは、辛いね。」

先輩 「…僕、大学でこっちに出てきたんですけど、こっちに来てからも、ちゃんと毎日、必ず、夜になったら連絡を取り合っていたんです。それだけは欠かしちゃいけないと思って。たとえ就職が決まって、研修で遅くなっても、何があっても。ずっと、遠距離でも、ずっと支えあってきて…。いつかは、彼女もこっちに呼んで、一緒に暮らそうと、二人で暮らそうと思っていたのに…。」

箱女 「別れちゃったん？」

先輩 「音信不通です。」

箱女 「そうか、それはきついね。」

先輩 「毎日電話していたのに…。」

箱女 「就職してはじめてのうちはね、聞いてほしいこといっぱいあるもんね。」

先輩 「きつと、僕のことなんか忘れて、もしかしたら他の誰かと…。5年も付き合っていたのに。毎日電話していたのに。ずっと一緒だと思っていたのに。」

箱女 「そうか、そうか。」

先輩 「女々しいですよね。」

箱女 「そんなことないで。寂しいよな。」

先輩 「電話してしまっんです。」

箱女 「ん？」

先輩 「電話してしまっんです。出てはくれないと分かっているのに。」

箱女 「そうなん。」

先輩 「同期…友達には、もうかけるな、よけい嫌がられるだけだ、とか、距離を置くことも大事だ、とかって言われるんだけど。」

箱女 「…うん。」

先輩 「距離を置くって、物理的な距離はもう充分すぎるくらい離れているわけだから…大体、距離を置くって何なんだ。って思えてきて…。北海道ですよ？北海道。ここから何時間かかると思います？丸一日かかったって、まだつかない。僕の地元はね、空港からまだ何時間かかかります。交通費だって信じられない値段がかかる。連絡手段は電話とメールだけ。今なにをしているのかなんて見当もつかない。それなのに電話しちやいけないなんて、我慢しろなんて…。」

箱女 「うん。うん。」

先輩 「あれ。」

箱女 「ん？」

先輩 「いや…『落ち着け』とか言わないの？」

箱女 「誰が？」

先輩 「いや…他の人だと大体僕がこういう話をするよ、『落ち着け』だの『感情的になるな』だの言われるから。」

箱女 「別に、先輩落ち着いてるやん。昨日酔っぱらって喋ってた時より大分まともやで。」

先輩 「そう…ですか。」

箱女 「それに、全然ふつうの感情やと思うで。」

先輩 「はあ…。」

箱女 「電話、我慢できなかったんやね。」

先輩 「うん。どうしても我慢できなくて。」

箱女 「そっか、そっか。でもな、こっちが暗くなってたら、話さなくっても、それ、相手に伝わるで。」

先輩 「え？」

箱女 「自分が思ってることって大概相手も同じようなこと思ってるんやで。」

先輩 「は？」

箱女 「当たり前やん…そんな長いことつきおうてたんやろ？」

先輩 「うん。」

箱女 「そんなんな、以心伝心や…テレパシーや…ビームだし…だったんやろ？」

先輩 「ビーム？」

箱女 「…いや、馬鹿にしたんちゃうで。」

先輩 「…。」

箱女 「いやいや、冗談の通じひん人やな。」

…

箱女 「あんだ、信じてへんの？」

先輩 「え？」

箱女 「いや、自分自身を。」

先輩 「どういふこと？」

箱女 「今、あんたはこんなに頑張ってるやん。ちゃう？一生懸命就職活動したんやろ。入社して、これからも頑張っていくんやろ。」

先輩 「…。」

箱女 「大丈夫やで。」

先輩 「大丈夫。」

箱女 「うん。今までの自分に恥じないように、頑張るなさい。」

先輩 「…ありがとう。」

箱女　　はいはい、また明日ね。」

先輩少し足取り軽く家路につく。
また、救ってしまった。

箱女　　はあ…。やっと止んできたね。あの子の心も晴れたらいいな。」

M5 嵐の予感

キヤバクラ嬢嵐のようにダッシュユで出勤

箱女　　ほら、言わんこつちやない!!」

キヤバクラ嬢　　遅刻遅刻!!」

箱女　　あんたが行かな、お店開かへんねやから!!」

キヤバクラ嬢　　分かってる!!」

箱女　　やっと止んだと思ったのに…まるで嵐やな。」

箱女、誰もいなくなったのを確認して

箱女　　「明日は、先輩、来るかな。」

…

箱女　　翌日も翌々日も先輩はやってきた。

そのたびに、コーヒーとかナントカとか、レッドナントカとか、しよーもないのみもんこうて、今日は山場やーとか、今日は戦いやーとか、訳わからん気合いいれて、仕事場に向かった。先輩の言う山場とか戦いとかっていうのは、その父のサラリーマンのおっちゃんらにしたらしよーもないこと。やけど、皆が通る道やからな。上司に怒られて、いっぱい怒鳴られて、なんか孤独で。久しぶりに大学に戻って先輩風ふかせてみても、結局お給料なんか雀の涙で。」

やんな、おっちゃん。」

サラリーマン、くたくたになつて帰宅。

サラリーマン　　ああ、そうだな。お休み。」

箱女　　夜遊び、言いながらほんまは夜遅くまで接待して、ゆっくり休まんと若手育成のために朝はように会社に行く。サラリーマンの鏡やな。

世の中派手な仕事ばかりが目立つけど、ちゃんと影で支えてるおっちゃんみたいな人がおらんと、絶対世の中まわっていかへん。

どれくらいの人が、そのこと知ってるんかな。きつとおっちゃんにもやりたいことはある。昔は先輩と同じように野望に燃えていたはずや。それなのに、今は社会の歯車になってる。」

サラリーマン
もう、くたくただ。」

イイ悪魔
「これだけ働いても」

サラリーマン
休める場所なんてない。」

ワルイ悪魔
家では家での戦いが待つ。」

イイ悪魔
定年まで働いて」

ワルイ悪魔
残るのはローンの返済だけ…。」

イイ悪魔
それでも、続けるしかない。」

ワルイ悪魔
本当に」

イイ悪魔
何のために？」

ワルイ悪魔
常識。」

イイ悪魔
守るもの…」

ワルイ悪魔
妻と子供」

イイ悪魔
家庭」

ワルイ悪魔
箱の中の家族。」

サラリーマン
「うるさいなあ、もう…。」

「…ん？って、誰だ？」

「誰が喋った？」

「疲れているのか。」

サラリーマン首をかしげて出ていく。

ワルイ悪魔
サービス残業」

イイ悪魔
時間外労働」

ワルイ悪魔
お疲れ様です。」

イイ悪魔
お疲れ様です。」(同時に)

靴の音

男の靴の音

女の靴の音

ホームレスが顔を出す。

ホームレス
雑魚ばかり。雑魚ばかり。あるもの壊して何が楽しい。食うもの埋めて何が自由だ。あつらえられたおべはそんなに立派か。そりやあ良かった。来世が楽しみだ。」

2羽のカラス、ホームレスの方によって来る。
ホームレスはカラスに餌をやる

ホームレス　お前たちには羽があるだろう。違うか。ほら、所せましとその毛穴の中から生えそろった無数の羽が。どうしてそれを使わない。欲は飛ぶのを忘れてしまったのか。」
「忘れるわけではないな。欲の羽は海馬の中にあるんだ。海馬の中からはさざ波が聞こえてくる。海に向こうの懐かしいさざ波。いつから空は海を映さなくなったんだ。」
「無駄なものが愛おしかったころ、利便性という魔物を真逆から睨み、全く違うものを作り出してたあの頃。…動く歩道に乗った今のお前らは、毎日ぼんやりと過ぎてゆく景色を見ているだけか。何も変わらず、誰も驚くことのない景色を。いつしか人間は、騒音をかきけす能力を身に着けた。おい、聞こえるか。耳が発達しすぎた人間たちよ。」

M6 ホームレス

軽快なステップを踏むホームレス。
車や、電車いろんな音を拾ってステップを踏む。

ホームレス　おーい、きーこえーるーかー!!」
毎日の騒音の中で、これくらいの声を出さないと、自分の言葉はすぐにかき消されるんだ。」

ホームレスはよく見ると、まだ幼さの残る子供のように見える。しかし物乞いをするストリートチルドレンにはない、どこか悟りきった落ち着きを感じる。
そんな彼の言葉はどこどこで物語の核心をつく。
観客には支離滅裂に聞こえるかもしれないが、一番の深層心理を語っているのは彼である。最初から、最後まで。
言葉を言い尽くしたホームレスは、また去って行く。

その様子を見ているひとりの傍観者。一箱女である。彼女もまた、この物語の核心に遠く昔から気付いているひとりである。そして、この物語で描かれるもう一人の箱女—美奈子。
今日も家に帰ってきた。
ここは、美奈子の箱の中である。

M7 誰も居ない箱の中で

誰も居ない箱の中
今日も「おかえり」と一人でつぶやく
退屈な毎日を抱えても
私のお腹はいっぱいになることがない
どうしようもなくお腹がすいたら
きつと、自分の足でここから出ていくのだろうかけれど

今は本当に便利な世の中だから
適当にお菓子をつまんでおける
私のお腹の中の海は

きつとそのうち破裂して

この身体を壊しちゃうんだろうなあ
きつとそのうち

♪ この家をも、壊しちゃうんだろうなあ

サラリーマン ただいま。」

…。」

帰ったよ。」

女子高生 あ、お父さんお帰り。」

サラリーマン お母さんは？」

女子高生 まだ。」

サラリーマン ごはんは？」

女子高生 パン食べた。」

サラリーマン 今日学校は、

女子高生 行ったよ。」

サラリーマン うん。」

…今、」

女子高生 10日。新学期が始まって休んだ日数は10日。あと40日休んだらアウト。」

サラリーマン そうか。」

女子高生 大丈夫、ちゃんと卒業はするから。」

サラリーマン うん。」

帰ってくる主婦。

主婦 ただいまー。ごめん、遅くなっちゃった。美奈ちゃん、ただいま。」

女子高生 うん。」

主婦 おばあちゃん、また美奈ちゃんに会いたって。」

女子高生 体調はどうなの。」

主婦 うん。前よりはずっと元気よ。首もまっすぐになってきたし、食欲もあるし。ごめんね、ご飯にしようね。」

女子高生 わたし、パン食べた。」

主婦 あら、じゃあいい？」

女子高生

うん。」

主婦

「分かった。お父さん、ご飯にしましょう。」

女子高生

「お風呂入ってくる。」

主婦

「まだ沸かしてないわよ。」

女子高生

「シャワーでいい!」

主婦

「はあ。」

サラリーマン

今日は美奈子、学校に行ったのか。」

主婦

「ええ。先生からも登校してきたって連絡入った。」

サラリーマン

「そうか。良かった。」

主婦

「美奈ちゃん、卒業できるかな。」

サラリーマン

「なにがなんでも卒業はしてもらわないと。」

主婦

「もう10日よ。」

サラリーマン

「さつき美奈子に聞いた。」

主婦

「夜は寝ない。朝は起きない。」

サラリーマン

「そうか…。」

主婦

「何度電話しても出やしない。」

サラリーマン

「君は、その…美奈子が起きて学校に行くまで、家にいることはできないのか。」

主婦

「実家に行くってこと?」

サラリーマン

「いや…おかあさんの面倒は、別に君じゃなくても、おにいさんに頼んでみるとか。」

主婦

「兄さんは無理よ。もう何年も会っていないのに。」

サラリーマン

「ルパーさんを雇うとか。」

主婦

「そんなお金ないじゃない。」

サラリーマン

「うちが出したっていい。毎日じゃなくてもいいんだ。」

主婦

「…。」

サラリーマン

「そうしたら、今みたいに君が、毎朝出かけなくても良くなるだろう。」

主婦

「18年。」

サラリーマン

「え?」

主婦

「18年よ。あの子が生まれて18年。18年間、私はずうっとこの家の中にいたわ。一步も出ずに。」

サラリーマン

「しかし、実家でも君は家事を手伝っているだろう。家でしていることと同じなんじゃ…。」

主婦

「15分。」

サラリーマン

「え。」

主婦

「たった、15分。新快速で一駅。私にとっては大切な15分。」

サラリーマン

「電車?」

サラリーマン

「そう。私ね、本当に久しぶりに電車に乗ったの。朝の電車。皆がどこか出かけていくあの空気。あなたにとってはいつもの風景かもしれないけれど。私にとっては本当に久しぶり。…いつもはほら、車だったでしょ。私が一人で出かけることなんかなかった。」

「…今年、今年が終われば、美奈子は高校を卒業する。今よりも、もっと手が離れる。あいつも今のように私たちにも甘えていられなくなる。」

主婦 「…そうね。」

サラリーマン それまで…」

主婦 そうよね。美奈ちゃんの体調がよくなるまで、今まで通り私が朝、起こして学校に向かわせるわ。」

サラリーマン 悪いな。」

主婦 大事な時期だもんね。」

女子高生はずっと二人の間で会話を聞いている。

しかし、その姿は二人には見えていない。そんな風に観客には見えている。

女子高生 大事な時期か…。」

ワルイ悪魔 あ、聞こえちゃった？」

女子高生 あー、久しぶりに出てきたー」

イイ悪魔 わー久しぶりー」

女子高生 久しぶりー」

ワルイ悪魔 なんだ、元氣そうじゃん。」

女子高生 ふふ。お母さんも可哀想だよ。あの電車での1分があの人にとっては息抜きだったんだ。」

イイ悪魔 物分りのいい子。」

ワルイ悪魔 いやいや、本当に毎日実家に行っていたとも考えにくいけどな。」

女子高生 確かにーありえるー」

ワルイ悪魔 親も人間だからね。」

女子高生 家族ごっこ。」

イイ悪魔 どこもおんなじよ。」

女子高生 あたしさー、病氣、治したくないんだ。」

ワルイ悪魔 病氣？とっても元氣そうに見えるけど。」

女子高生 小さいころもさ、わざと薬飲まないでみたり…。」

ワルイ悪魔 治ったらさ、もう誰も心配してくれなくなるでしょ。だーれも。」

イイ悪魔 自分が思っているほど、世間はあんたに興味ないよ。」

女子高生 箱から出るのも、自分次第だよ。」

ワルイ悪魔 なにそれ、いちいち腹立つんだけどー」

イイ悪魔 自分次第…か。まあ、それもそうなのかな。」

女子高生 ねえ、お母さん、ちよつと散歩してきてもいいー？」

ワルイ悪魔 そーまでだよー。えーつと、駅くらいまで」

女子高生 うーん。じゃあ…じゃあコンビニでジュース買ってくる」

何日か経ったであろうある日

先輩が箱の前で話をしている

箱女 先輩なんか今日、元気そうやなあ。」
先輩 あ、分かる？」

箱女 先輩ほどわかりやすい人もおらへんわ。」
先輩 そうかな。…実は。」

箱女 彼女から連絡来たん？」
先輩 あーもう、なんで先に言うかなあ？」

箱女 「ふーん。良かったやん？」
同期の言うとおり、最近は連絡取ってなかったんだけど、なんかまた俺やっちゃって…。仕事で大ボカ。発注の個数を間違えて…。」

箱女 ああ、なんか言っとったな。先週やつけ？100個を1000個？そら、あかんわな。大損や。」
先輩 そう。よく覚えてるなあ。」

箱女 あたしは人が言ったこと忘れへんよ。それで？」
先輩 残りの990個は…。」

箱女 そうじゃなくて、彼女や。」
先輩 ああ…駄目だつて分かってたんだけど、どうしても誰かに聞いてほしくって、ここから帰ってから、電話した。そしたら、電話に出てくれて、話を聞いてくれて、今度田舎に帰ったときに、会えることになったんだ。」

箱女 そうか。なんかそれもいい方向に働いたってことやね。」
先輩 そう。ミスしたことが返って良かったかな。と思えてきて。」

箱女 そら、大事な人が仕事のことですんでたら、支えになりたいって思うんが、女つてもんやからな。」
先輩 分かるんだ？」

箱女 なによ、あたしやつて一応女やわ、馬鹿にせんときや。」
先輩 ほははは。怒った。」

箱女 そら怒るわ。」
先輩 それじゃあ…。」

箱女 え、今日は買わんの。そうなん。」
先輩 うん。あ、ごめんささい。」

箱女 いや、別にええねんで。いつでも話にきてよ。ほんならね。」
先輩 浮足立って帰っていく。

箱女 「あ、給料日前か…。」

箱女 先輩は土日も顔を出すようになった。ほとんど毎日、同じ時間に。同じ時間に起きとかへんと、月曜日寝坊しそうで怖いらしい。土日くらいは、ゆっくり寝たらいいの…。

でも、あたしは分かった。先輩は、あたしに会いに来てるんや。彼女に会いに田舎に帰りたくても、なかなか帰られへん先輩の心の穴に、この汚いあたしが、すっぴり入ってしまったんや。簡単や、男なんて。優しくしたらすぐに寄ってくる。せやのに他の女との話を平気でしてきよる。いつまでも折り合い付けずに何かと理由をつけて、やってきよる。」

分かってたくせに。」

何が。」

「うなることが。」

「。。」

出会った日から。」

「うるさい」

出会って見たかった。」

「うるさい」

もう何度も同じ過ちを犯しているのに。」

「うるさい」

「うるさい」(同時に)

いつの間にか舞台上にいるキャバクラ嬢

イイ悪魔

ワルイ悪魔

キャバクラ嬢

箱女

キャバクラ嬢

箱女

あ、おっちゃんや…。」

サラリーマンが登場する

キャバクラ嬢

サラリーマン

キャバクラ嬢

サラリーマン

キャバクラ嬢

サラリーマン

キャバクラ嬢

サラリーマン

もう、帰った方がいいんじゃない。」

「分。」

「うん。」

あと五分だけ。ここをぼーっとしてから帰る。」

あったかいの、いれようか。」

「いい。」

…。」
「なんでかなあ。なんで喋っちゃうんだろかなあ。家庭のこと、仕事のこと。」

キヤバクラ嬢
「はは、喋りやすい？」

サラリーマン
「うん…。」

サラリーマン
「なんでだろうなあ。」

キヤバクラ嬢
「それは私が、誰でもないやつだからでしょ。」

サラリーマン
「いや違う。」

キヤバクラ嬢
「そうだよ。ここはそういうところだもん。」

サラリーマン
「違う。」

キヤバクラ嬢
「この名前だってね、適当につけたの。私の本名だって、住所だって知らないでしょ。ここはそういう所だよ。」

サラリーマン
「違うんだ…」

キヤバクラ嬢
「じゃあさ、私との将来、考えられる？」

サラリーマン
「…。」

キヤバクラ嬢
「家族も仕事も全部捨てて、私とどこかに行ける？誰にも紹介できないようなこんな女を、一生の伴侶として今から受け入れられる？」

サラリーマン
「…。」

キヤバクラ嬢
「だから何でも言えるんだよ。」

サラリーマン
「…ねえ、一つだけ聞いてもいいかな。その…一つだけ。ずっと聞きたかった。あの…その…みほちゃん…あ、もちろんこれはこのお店での名前なんだろうけれど…、えっと、君は、その…。」

キヤバクラ嬢
「なに？」

サラリーマン
「…俺のことは十分すぎるくらい君に話した。もう何も無い、君の前で俺は丸裸だ。」

キヤバクラ嬢
「そうかもね。」

サラリーマン
「……子供この頃の夢ってなに？」

キヤバクラ嬢
「…。」

キヤバクラ嬢
「キヤバクラ嬢、イイ悪魔、ワルイ悪魔の視線の先には箱、そして箱女。」

ピアノの音がする

箱女
「え…。無理やで、そんなん。休みないもん。先輩、何ゆうてんの？アホと違う。あたしは毎日ここに座ってるだけの女やで。服もこれしかないし、先輩みたいに土日に着るおしゃれな服とか持ってないよ。ほんま、何ゆうてんの？あかんあかん、屋根のないここは。ダメ…太陽の光浴びたら日焼けしちゃうから…」

箱女
「なに、笑ってんの…いやや、絶対いかへんで。絶対。」

M8 箱の外(ピアノのみ)

雨音が聞こえる。曲線が踊る。箱女の声が聞こえる

箱女
「いややってゆうてるのに、先輩はあたしを箱から出した。箱から出たあたしは、ただの女やった。」

可愛いものみたら気持ち悪く微笑んでしまうし、甘いもの食べたら胸が熱くなった。外の世界はホンマに明るかった。そして、先輩との時間は、めちゃくちゃ楽しかった。

でも、あたしは知っている。この場所で、この箱に入って、いろんな人の話を聞いてきてんもん。先輩の考え、末路、寂しき、彼女への思い。あたしは誰よりも知って

る。

音が止む

月曜日になつたらまたあの箱戻らあかん…。戻りたくないな…。このままずっと一緒におりたいな…。

…!

「ごめん。あたし、何ゆうてるねんな。ごめんな、先輩。悲しまんとつてな。大丈夫やから、ほんまに、大丈夫やから…あたしは平気やから。」

ダンサーが現れる。ダンサーは箱の前でダンスを踊りだす。

M9 アグリー

♪

鏡に映る自分に問いかける

誰も答えてはくれないけれど

醜さは爪先にも表れる

いつも踵が曲がつている

これが私

無理に生き急ぐなんてことはしない

もう十分生きてきた

私の頭の中にはたくさんメモがあつて

毎日間違えないように必死なんだ

アグリー

人は私をこう呼ぶ

アグリー

もう聞き慣れた

アグリー

幼い頃から

アグリー

何度も聞いてきた

ジェラシー

私は人を羨む

ジェラシー

もうそれにも慣れた

ジェラシー

幼い頃から

ジェラシー

お前と戦ってきた

私の頭の中にはたぐさんのメモがあつて
毎日間違えないように必死なんだ

アグリー

人は私をこう呼ぶ

アグリー

もう聞き慣れた

アグリー

幼い頃から

アグリー

何度も聞いてきた

ジェラシー

私は人を羨む

ジェラシー

もうそれにも慣れた

ジェラシー

幼い頃から

ジェラシー

お前と戦ってきた

♪

その様子を見ている女子高生。手にはコンビニの袋。中にはジュースやグミ。
女子高生 甘えているだけ…か。」
ダンサー …はあ。」

ホームレス大きな袋を持って登場する。

ホームレス

「たくそ。」

ダンサー　なに？」

ホームレス　「たくそ。」

ダンサー　「..。」

ホームレス　聞こえてるか？」

ダンサー　「..。」

ホームレス　音だよ。」

ますます、頑張つて踊るダンサー。

ホームレス　聞こえないなあ。」

ダンサー　「..。」

ホームレス　それに、楽しそうじゃない。」

女子高生　「楽しそうじゃない。」

ホームレス　「笑つてわかるか。この違い。」

ホームレス、突然踊りだす。

ダンサーの見たことのないようなステップを踏む、そしてその動きは次第に、音楽隊、雨音たちの心を揺さぶり、音を奏でさせる。

M10 ホームレス②

ホームレス　お前は昔から音を変えようとしている。自分が変わらないと音は変わらない。何も聞こえてこない。」

徐々に高まる鼓動。

先に踊りに加わったのは、ダンサーではなく、女子高生だった。

純粹無垢な踊り。音を感じるその踊り。それがダンサーの忘れかけていた闘争心を起こし、ダンサーも踊りに加わる。

女子高生　雨や_三雨_三」

ずっと待ってた_三雨や_三」

楽しい夜は続く。

サラリーマン　遅い_三」

主婦　どこまで行つてたの_三」

女子高生　コンビ_三。」

サラリーマン　ぶさけるな_三」

主婦　美奈ちゃん_三。」

サラリーマン
どこで、誰と、何をしていたんだ？」

主婦
体調悪いんだから。」

サラリーマン
お前は病気なんだ？」

女子高生
「ごめんなさい。」

主婦
心配なのよ、私たち、美奈ちゃんのことを、本当に心配なのよ。」

女子高生
分かってる。」

サラリーマン
月曜日は」

女子高生
行くよ、学校。絶対、行く。」

主婦
絶対よ。お母さん、もうどこにも行かないから。美奈ちゃんが学校に行くまで、ずっとお家の中にいるから。」

ワルイ悪魔
そんなに簡単に生活習慣が変わるわけない。」

ワルイ悪魔
もちろん、翌週も。」

女子高生
ちゃんと起きられたんだよでも、制服のリボンが見つからなくて、探していたら遅刻したの。大丈夫、明日からはちゃんとチャイムがなるまでに行くよ。」

チャイムの音

主婦
お父さん？うん。今、遅刻だけど登校したわ。」

箱女
月曜日、先輩はいつもと同じ電車に乗っていった。箱の前では立ち止まらずに。『お疲れ。』聞こえてたと思うけどな。まだまだ着慣れていない、スーツの背中が可愛いな。」

女子高生
木曜日は、スカートのプリーツが汚くて、アイロンかけて直していたら遅刻したの。でも、それ以外はちゃんと毎日間に合ってるよ。」

ゆっくり暗転

それから何回かの雨と、何回かの晴れ、一回の嵐が通りすぎて、ちよつとずつ、先輩の中の矢印が変化していった。箱にも、寄るようになった。」

明転

箱女
あ！おはよう！」

女子高生
おはよー！」

箱女
ちゃんとした時間やん、ここ数日。」

女子高生
でしょ。ふふ。最近ちゃんと起きられるんだ。」

箱女
どんな心境の変化？」

箱女
意味。」

箱女
はあ？」

女子高生
生きている意味がようやく見つけた。」

箱女
えらい、たいそうな話やね。」

女子高生　　たいそう…かな？だって、私が今まで家から出られなかったのは、自分の生きている意味が分からなかったからだよ。今は、ちゃんとわかるもん。これがしたい、あれがしてみたい。って。だから、朝も起きられるし、夜もへんな夢を見ることなく、ちゃんと眠ることができる。」

箱女　　それってさあ…まあいいわ。良かったね。」

女子高生　　「ふふふ。見つけちゃったんだー。」

箱女　　良かったな。」

軽いステップを踏んで登校していく女子高生
箱に戻った箱女

箱女　　あ、先輩おはよう！」

先輩　　あ、おはようございます！」

箱女　　どうしたん、先輩。めっちゃ生き生きしてるやん。」

先輩　　「今日からね、僕が発案したプロジェクトがスタートするんです。」

箱女　　「そうなん！良かったやん！」

先輩　　「うんとっても。まあ、発案と言ってもね、営業中にちよこつと上司に提案してみたものなんだけど。『それいい！それ、やろう！』って。」

箱女　　「それってすごいことなんちゃうの？すごいやん！」…つてことは、先輩、出世街道やな！」

先輩　　「いやあ、まだまだ。」

箱女　　「そこは謙遜せんでええんちゃうの。今までの頑張りが認められたんやろ。胸はらな。」

本当に胸をはる先輩

箱女　　「いや、ホンマに胸はってどうすんの。変な人やで。はは。」

先輩　　「はは。じゃあ、これ。」

箱女　　「はい、120円ね。」

「ああ…ほんなら、いつてらっしやい。」

颯爽と去って行く先輩。

女子高生といい、先輩といい、今日はキラキラした鬱陶しい朝だ。

箱女　　「おつりも受け取らへん」と行っただわ。…いつの間にか、ギャグも言えるようになって…おもしろいけど。あたしの代わり映えの無い毎日に比べて先輩の毎日は、すごく刺激がありそうや。」

箱女　　「…いいなあ…」

先輩のウキウキする顔がまぶしい…日焼けしちゃうよ。」

キャバクラ嬢が現れる

箱女 「おはよう！え、どうしたんこんな時間に。元気なん？まだお酒のこつてるんちゃうの？え、大丈夫？」

キャバクラ嬢 「ううん。最近は12時には上がるようにしてるんだ。今日は別の用事。」

箱女 「え、そうなん。」

キャバクラ嬢 「うん。朝の空気って夜とまるで、全然違うね。いつも朝に帰るときは、疲れと眠さと戦っていたから、全然気が付かなかった。」

箱女 「そうかな…また、なんで…」

キャバクラ嬢 「なんか、私、お客さんにいわれちゃったんだ。」

箱女 「例の？」

キャバクラ嬢 「そうそう。まあ、その人だけじゃないんだけど。」

箱女 「なにそれ、モテモテやんか。」

キャバクラ嬢 「もててないよ。一番じゃないもん。」

箱女 「…。」

キャバクラ嬢 「私さあ、今しかないと思うんだよね。もう年も年だし。」

箱女 「今しか…？」

キャバクラ嬢 「うん。今の生活変えるのって。」

箱女 「お金とか、どうすんの…？」

キャバクラ嬢 「うーん。なんとか、するよ。あ、これください。」

箱女 「え、新聞買うの？」

キャバクラ嬢 「うん。お勉強。オジサマの相手だけじゃ、情報が偏るでしょ。」

箱女 「今までなんぼゆうても読まへんかったのに…そうか、偉いな。」

箱女 「はい、ほないってらっしゃい。」

いつもとは違う方向に去って行くキャバクラ嬢

箱女 「みんな、楽しいんやね。」

箱女 「あたし。あたしは先輩がいなかったら箱の外に出られへん。嘘ちやうよ。服着せたのも、化粧させたのも、みんな先輩やん。」

羨ましいなんて、この世の人に思ったことなんてなかったのに、今この箱の中にあるんは、妬みとかスレミとかなんか汚いもんでいっぱいや。あたし、自分の中身まで汚くしてしまったんやろうか。」

行き交う人々
混じって、イイ悪魔とワルイ悪魔も出てくる。

箱女とは目を合わさない。

「はい、100円。」

「はい、120円。」

「はい、220円。」

「はい。」

「はい。」

「はい。」

人々の中にいる主婦とサラリーマン

主婦 「おはようございます。」

箱女 「いらっしやいませ。」

主婦 「コーヒーとお茶と、あとそれからこれも。」

箱女 「…これ。」

主婦 「あ、限定だ。ラッキー。」

サラリーマン 「おはよう。」

箱女 「いらっしやい。」

サラリーマン 「いつものやつと、あとこっちも。」

箱女 「日経とスポニチね。」

サラリーマン 「できる男は二刀流。」

箱女 「はい。」

サラリーマン 「いってきます。あー、今日もいい天気だ。」

イイ悪魔とワルイ悪魔だけがその場に残り、他は出かけていく。
登校してくる女子高生

イイ悪魔 「おーはーよー」

女子高生 「おはよー。」

ワルイ悪魔 「元気そう。」

女子高生 「うん。」

イイ悪魔 「今日体育あるよ。」

女子高生 「大丈夫。」

ワルイ悪魔 「変わったねー。」

女子高生 「変わったの。」

「今日もレッスン？」

女子高生 「うん。」

ワルイ悪魔 「ダンス？」

女子高生 「そう。」

「楽しそう。」

女子高生 「教えてもらおうの。」

ワルイ悪魔 「ステップ…とか？」

女子高生 「違うよ。」

「ダンス、でしょ。」

女子高生 「音楽。」

ワルイ悪魔 「音楽？」

女子高生 「音楽のね、聴き方、聴こえ方。」

「音楽…好きだったもんね。」

女子高生 「覚えてるのー？」

ワルイ悪魔 「そりゃそうだよ。」

「だって、ずっと一緒なもの。」

女子高生 「音楽とか、美術とか…大好き。」

ワルイ悪魔 「体育は？」

女子高生 「全部音なんだよ。全部。砂を蹴る音、ジャンプする音。…だから、体育も、楽しい。」

「変わったねえ。」

女子高生 「いい風にね。」

ワルイ悪魔 「はは。あ、もうすぐ朝礼だ。」

女子高生時間割を見て

女子高生 「あーあ、なんで、選択、書道にしたんだろう。音楽にすればよかった。」

楽しそうに消えていく女子高生と悪魔たち

箱女 「あ、雨や…。」

もう一つの箱には家庭。座って談笑する主婦とサラリーマン。

主婦 「それでね、何度電話しても、母さんったら変なこと言うから。」

サラリーマン 「お隣さんも大変だったな。」

主婦 「そうですね。『こちら御手洗会計事務所です。』だって。」

サラリーマン 「会計事務所。」
主婦 「文房具屋よ。うち。今はもう閉めちゃったけど。」
サラリーマン 「なりたかったのかな、会計士に。」
主婦 「どうだか。」
サラリーマン 「御手洗ってのはなんだ。」
主婦 「分らない。うちは田中なのにな。」
サラリーマン 「ははは。しかし、よかったな。おかあさんの体もよくなってきて。」
主婦 「本当に。これも美奈ちゃんがちゃんと学校に登校してくれているからね。」
サラリーマン 「本当に。そろそろ夏だ。」
主婦 「そうね。夏休みね。」
サラリーマン 「予備校には申し込んだのか。」
主婦 「一応ね。受験生なんだから。」
サラリーマン 「今から頑張れば国公立は厳しくとも、上位の私学は狙える。」
主婦 「そうよね。」
サラリーマン 「あいつ、元々、頭はいいんだ。」
主婦 「今から頑張れば。」
サラリーマン 「頑張ってもらわないと。」
主婦 「…本当に良かった。」
サラリーマン 「何が。」
主婦 「私、美奈ちゃんが大学に行ったら、またちょっと歌ってみようかな。」
サラリーマン 「歌か。」
主婦 「私の青春、やっぱりずっと歌があったもの。」
サラリーマン 「いいんじゃないか。主婦業の中で趣味を見つけるのは。」
主婦 「今でもね。」
サラリーマン 「うん。」
主婦 「生活中のすべてが音に聞こえるの。」
サラリーマン 「昔もそんなこと言っていたっけ。」
主婦 「水道の音、自動車の音、鉄道の音…。」
サラリーマン 「話し声。」
主婦 「テレビの音、クーラーの音…。」
サラリーマン 「耳を傾けたことなんて、なかったな。」
主婦 「ずっと歌いたかった。昔みたいに。」
サラリーマン 「いいんじゃないか。美奈子が大学に入ったら。」
主婦 「ありがとう。」
サラリーマン 「あと半年、美奈子には受験生として頑張ってもらわないと。」
主婦 「そうね。」

サラリーマン 「今の時代、しつかりとした職業につかないとな。」

主婦 「会計士とか？」

サラリーマン 「はは。そうだな。それがあいつのためだ。」

M10 ame② (リップ)

箱女

「ありがとー！おめでとー！さよならー！」

「一気につぶやくよ。あたしの呟きは雨になる。空は泣いてるねん。あたしのかわりに。あたしは泣かへんよ。あたしは誰かの空とかとちやうから。涙は、自分のために流すもんとちやう。誰かのために流すもんや。」

「自分のために流した涙は、きたない。きたない涙は、この箱の中、あつという間にいっぱいにしてしまう。これ以上汚くなったらあたし…立ってられへん。だから、あたしは泣かない。」

箱女

「それから、やっぱりと言うかなんと言うか、なんとなく、段々と、先輩は来んようになった。」

「箱の中は空っぽや。何も入ってへん。おかしいな。しょうもないお菓子も、しょうもない本も、しょうもない飲み物も、いっぱいあつたはずやのにな。」

M12 オーディション②(リップ)

オーディション会場でのダンサー

今までは明らかに違う表情

周りの応募者たちが踊る中、じっと前を向いて立っている。

ホームレス 聞こえているか。」

ダンサー まだだね。」

ホームレス 聞こえるまで待つんだ。」

ダンサー 大丈夫。」

ホームレス うん。」

ダンサー 自分の音はこの身体が一番よく知っている。」

ダンサー きたー」

ダンサーが踊る

その踊りに加わっていくホームレス・女子高生・イイ悪魔・ウルイ悪魔・他のダンサーたち

M13 スター

♪

ああどこまでも、続いていくこの青い空
海は空をうつしいつまでも青い
ああどこまでも、続いていくこの青い道
わたしの心を置き去りにしないで

いつかきつとこの砂場から出て
砂漠の中の湖を見つげること
それが私の希望だったの

砂に埋もれた星屑は大きな嵐を引き起こし
空に放たれ星になつたわ
一番星はもうすぐそこ、間違はなく私ならそれを手に出来る

ああどこまでも、続いていくこの青い空
海は空をうつしいつまでも青い
ああどこまでも、続いていくこの青い道
わたしの心を置き去りにしないで

♪

昔を思い出して主婦が歌う。
それに重なるダンス。不思議な歌。しかし、心に残る音。

その様子を後ろからまぶしそうに見ている箱女
舞台の奥にはキャバクラ嬢とサラリーマン

キャバクラ嬢 「回だけ。」
サラリーマン そうだな。」
キャバクラ嬢 やったー！
サラリーマン アフターって言う形で。」
キャバクラ嬢 うん。なんでもいいよ。」
サラリーマン お金、ないよ。」
キャバクラ嬢 お茶飲んで、お話すだけでいいの。」

サラリーマン 「こんなおじさんと？」

キャバクラ嬢 私ももう、おばさんだよ。」

サラリーマン はは。」

キャバクラ嬢 相談したいことがあるの。」

サラリーマン 相談？」

キャバクラ嬢 それに、教えてほしいことも。」

サラリーマン 俺に？」

キャバクラ嬢 うん。」

サラリーマン 答えられるかな。」

キャバクラ嬢 私、本当になにも知らないもん。このままだったら、ずっとここにいることになっちゃう。」

サラリーマン そういうことなら…力になるよ。」

キャバクラ嬢 どうしたの？」

サラリーマン いや…こんな俺でも…誰かの力になることが出来るんだな。」

先輩が登場

箱女 おはよ…」

先輩 おはよう三」

箱女 あ、先輩。久しぶりやん。日曜日やのに、何してるん。」

先輩 報告。」

箱女 ひっくりすること？」

先輩 どうかな。」

箱女 いやや、聞きたくないよ。」

先輩 「一番に言うって決めていたから。」

箱女 あたしに…？」

先輩 そう。本当に、あなたのおかげだと思ってる。」

箱女 そんなん…。」

先輩、箱女にこっそり耳打ちをする。

箱女 そうなんや…何がどうなって…。」

先輩 大生、分かんもんです。」

箱女 すごいな…。良かったやん。」

先輩 じゃあ、行ってきます。あ、これ、二つ。」

箱女 はい、楽しんでね。」

先輩 楽しいに決まっているよ。」

軽い足取りで去って行く先輩

…

箱女　　びつくりすんで。ほんまに。びつくりするわ。」

田舎には帰ってないんやって。ほんま、あたしが散々聞かされてた彼女とは別の女とくつついたんやって。」

箱女　　みんな、変わったな…。」

じわじわと箱によっていく殺し屋。
殺し屋とは現代社会のことである。

もう一つの箱には女子高生。
箱女の影と女子高生の影が重なる。

女子高生　　予備校？」

主婦　　そう。美奈ちゃん受験生だから。」

サラリーマン　　もう費用は振り込んでおいたから。」

女子高生　　ちょっと待って、どういうこと。」

主婦　　塾に行くの。大学受験のために。今からでも遅くはないわ。」

女子高生　　え、私、大学に行くの？」

サラリーマン　　当然だ。」

女子高生　　私…私行かないよ。大学。」

女子高生　　私、やるべきことを見つけたの。それは、大学じゃない。ほら聞いて。」

サラリーマン　　何を。」

女子高生　　お父さんには聞かえないの？音楽だよ。」

主婦　　…！」

女子高生　　世の中は音楽で溢れかえっている。音楽にはね、動きがあるんだよ。」

じわじわと箱女によっていた殺し屋が、方向を変える。
方向は女子高生の方へ。

女子高生　　だからね、私は大学にはいかない。ううん。きっと行けない。私ね、今やっと自由になれたんだ。」

サラリーマン　　やっぱこの子は…病気だ。」

主婦　　美奈ちゃん…。」

殺し屋の気配を察知し、走り寄るB羽のカラス。
その様子を遠くから見ているホームレス。
カラスと殺し屋がリンクしたところで一気に暗転

M14 現代社会

殺し屋B羽のカラスが踊る

ゆっくり殺し屋がカラスの首を絞めていく。

B羽のカラスは現代社会の手によって殺される。

キャバクラ嬢とサラリーマンがC人で歩いてくる。

その様子を物陰から見ている女子高生。

女子高生と主婦

女子高生 私、予備校に行った方がいいの？」

主婦 そりゃあね。」

女子高生 学校に行った方がいい？」

主婦 卒業できる程度にね。」

女子高生 友達と仲良く。」

主婦 それなりに学校生活を送ってくれたらいいわ。」

女子高生 大学は。」

主婦 それなりのところにね。」

女子高生 音楽…。」

主婦 そんなの、とつくの昔から聞こえてこない。」

…

女子高生 ねえお母さん、私が見ているものが幻覚だつて言うなら別だけど…知ってる？お父さんが…。」

主婦 もちろん、知っているわ。」

女子高生 …。」

主婦 ずっと、昔からね。あの人はずっと家になんか帰ってきていない。」

主婦 私は…長いことこの家にいすぎた。」

サラリーマン …この子は病気だ、この子は狂っている。この子が見たものは全て、この子の幻覚だ。君は…君は信じてくれるだろう。この子は病気だ。君が家にいさえてくれれば、

君が外に出なければ、この子は救える。この子は幸せになれる。」

主婦　もちろん、信じるわ。他にないもの。信じるものなんて。家の中にいた私には一人で立っていく力なんてない。だからもちろん、信じるわ。」

キャバクラ嬢　約束したのに…あの人は来なかった。やっぱり誰も、私を助けてくれる人なんていない。やっぱり私は、この中から出られない。」

女子高生　私の目に映るものが幻覚なら、どうやってこの脳はこの世を認知するのさ。私の思いが幻想なら、私の思想はどこへいくのさ。私は…私は…。」

女子高生　あ…雨や。」

M15 現代社会と女子高生

女子高生が踊る現代社会がそれを潰す
だんだん女子高生と重なっていくダンサー

軽やかな音楽とともに現れるホームレス
心人を救い出す。

ホームレスとともに逃げ切ったのはダンサー

女子高生は苦難の中踊り続ける

ホームレス　踊り続ける必要なんてない。踊りは体力を使う。ここぞというときに置いておくんだ。待て、今まだ君の音は聞こえていない。

女子高生にその言葉は届かない。いつまでも、自分の音を探す女子高生。
やがて力尽き、現代社会のモノとなる女子高生。

名残惜しそうに女子高生を見つめ、立ち去るダンサーとホームレス

女子高生　壁が…壁が迫ってくる。」

主婦　ごめんね、美奈ちゃん。」

サラリーマン　お前は病気なんだ。」

女子高生　ああああああああああああああああああああ…」

女子高生の末路。

それは、醜く苦しい。自分を傷つけ、痛めつける女子高生。
もう、悪魔たちは、いない。

女子高生　出てきてよ。ねえ、出てきてよ。今こそ出てきてよ。その青い羽で包んでよ。あたしをその背中に乗せて飛んで行ってよ。こんな嘘やって一緒に笑ってよ。舐めてよ
ほら…あたしの傷を…いつかいつかよほら…出てきてよ。慰めてよ。笑ってよ…。」

箱女　　なあ、先輩、約束したやん。そのスーツが似合うようになったら、また一緒に出掛けようって。いろんなもん、この目で見に行こうって。色んな経験しようって。外の空気吸っていっぱい吸収しに行こうって。…いつまでたっても迎えに来おへんから、あたし、こんなになっちゃったよ。」

暗転

それぞれが箱のなかに戻ってゆく。
それも一瞬のうちに。

箱という非現実的に引いた境界線の中に、あまりにもリアルに戻っていく出演者たち。

舞台が明るくなると箱の中には女子高生

女子高生　　朝は私を起こさない。夜は私に嘘をくれる。ここどころずっと、部屋から出ていない。人は私を環境に甘えた意気地なしと言うだろう。構わない。私はこが心地いい。私は病気なんだ。」

箱の中には先輩

先輩　　野心に燃えていたころが懐かしいな。今はそんな余裕なんてない。今の僕はあの上司のように社会の歯車になっている。もちろん今の状況をわるくは思っていない。こうやって働く大人がいることに…ちゃんと誇りだっけ持っている。」

箱の中にはキヤバクラ嬢

キヤバクラ嬢　　そうこうしているうちに朝が来てしまった。私にはこれしかないし、失ったら生きていけないものばかり。お世辞もおべんちゃらも大得意。お客様の秘密は墓場まで持っていくます。これが私の生き方だもん。」

箱の中にはサラリーマン

サラリーマン　　また今日が始まった。代わり映えのしない毎日だ。家族とはもうどれくらい口をきいていないだろう。家族と顔を合わせない日々にも慣れてしまった。このまま定年まで働くだけ。心配事なんて何も無い。考えても仕方ないことだ。」

箱の中には主婦

主婦　　朝起きて夜寝るまで、私の生活は一本線みだ。この一本線はこの先何かと交わることはないだろう。これが家族のためだし、自分のためでもあるのだから、私は構わないのだけれど。たまに出てくるあれだけ、あれさえ思い出さないようにしなくては。そんなこと、雑音が多いこの世の中では簡単なことなだけだ。」

箱の中には箱女

箱女

「これで、良かったんやろか。」
「便利な世の中やな。欲しいもんは何でも手に入れられる。どこにだって行ける。何にだってなれる。」
でも、あたしは結局、この中でしか生きられへん。こうやって四角の中から、キラキラ光ってるもんを見ることしかできへん。」
「みんなが欲しいもんは造り出したけど…ほんまにこれで良かったんやろか。」

M16 ダイオキシンの歌

降ってくるのは酸性雨
照りつけているのは紫外線
オゾンホールは広がって
気温はどんどん上昇する
生殖異常の原因は不明
人々が作り出したもの
それは ダイオキシン

市場競争に勝ったあと
そこに残ったダイオキシン

このまま行っても多分未来はある
こじ開ける力を持った
人間たち

本当の居場所はきつともっとずっと底
コンクリートにうもれている

泣いても 叫んでも 何も跳ね返ってこない
これが現代社会

翌朝、いつものように毎日が始まった。そこには羽のカラスが死んでいた。」

ダンサーとホームレス、二人の行方が分からなくなった。二人はめっきり顔を出さない。」

もしかしたら二人は、カラスと一緒にどこかに飛んで行ったのかも知れない。」

「雨だ。」

ダンサーとホームレス悪魔たちを引き連れて現代社会らと踊っている。
まるで、現代社会をあざ笑うかのように。
二人は逃げ切ったのだ。

M17 ame(リップ)

踊りの中音楽が聞こえだす。
心地いい、自然の中のリズム

踊りの中、だんだんと舞台は暗くなる。

発行元 せんすおぶわんだあ

発行日 2017年9月17日

ご利用について

作品の上演などについては、WEBサイトのコンタクトよりお問い合わせください。

著作権はせんすおぶわんだあに帰属します。

*本書の内容は予告なしに改訂となる場合があります。

WEB サイト せんすおぶわんだあ

<https://www.sens-of-wonder.com>

Twitter

@Sens_of_wonder